

論文審査の結果の要旨

氏名：福 尾 晴 香

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：伊藤比呂美における引用と越境の詩学

——交差する時間／変異する言葉——

審査委員：(主 査) 教授 紅 野 謙 介

(副 査) 教授 久 米 依 子 教授 高 榮 蘭

愛知県立大学教授 宮 崎 真素美

1980年代から登場して来た現代詩の詩人、しかもまだ活躍中の現役詩人の詩テキストを扱う主題そのものに危うい印象をもつのは当然のことである。しかし、伊藤比呂美のデビューからすでに40年以上が経過した。同じ80年代に40年前の戦後文学について研究することから出発したものにとって、十分に研究対象として資料もテキストもそろっている以上、躊躇する理由はない。現在ただいまの問題を扱うことは、他分野においても逆に必要な探究テーマである。しかも、伊藤比呂美のテキストを扱うとはいえ、彼女のテキストを通して現れてくる引用やインターテキストチャリティ、古典と現代のテキストの相互対話を主題化するのであれば、それは個別の作家研究を超えた普遍性を持ちうるであろう。

ではその引用やインターテキストチャリティというテーマはどのように論じるべきか。クリステヴァの理論的な提起以降、十分な成果が出ていない。古典文学の研究において引用論は、韻文においても物語においても典拠論として実績をもち、多くの積み重ねがあるが、どうしてもテキスト相互の静態的な注釈と本文解釈の枠にとどまって、クリステヴァのいう言葉のダイナミズムや生成変容にまで届いていないように見える。伊藤比呂美のテキストが注目されるのは、その点からして明らかである。しかも、伊藤の場合は、70～80年代のフェミニズムとも深いつながりがある。同時代のジェンダー・ポリティクスと生殖・出産に関わる私的な領域をめぐる「生政治」の文脈を接合し、古典文学から新聞記事、マニュアル本のような言説にいたるまでを切り取り、コラージュする手法は、まさに引用とインターテキストチャリティをめぐる研究に最適な対象だったと言えるだろう。

こうした観点から、本論文は、伊藤比呂美の従来扱われることの少ない作品群をふくめ、ジェンダー論的見地とは別の、言語論的視覚から詩人の特質をつかみ出そうとしたところが高く評価できる。文章も的確である。全6章のうち、第2章はそうした特質をもっとも良く反映しており、論者の本領が存分に発揮されている。一方、詩人のポリフォニックなあり方が各章で提示されているが、それらを俯瞰する、あるいは総括し緊密にまとめる論者の「結論」がまだ弱い。論文全体の構成についてはまだ多く課題を残している。

第1章の『テリトリー論2』については、1冊の詩集において、ポーランドのアウシュビッツを扱った詩から、最後の妊娠中絶や墮胎を扱った詩へとつながる構成が問題視されている。そこでは生と死、死と生、生まれることと滅ぶこと、文語と口語、江戸と昭和という対比が議論されているが、ともすれば問題が問題であるだけに倫理的な問いが用意されているように思う。伊藤の詩の場合は、倫理を超えた生と死のありようをもっと捉えていいのではないか。各詩篇の初出の明記、冒頭詩篇と末尾詩篇の〈蟻〉の呼応などについての論及もほしかった。

第2章「錯綜する引用と声／文字の重なり」は、繋がる女たちの声、変容と越境の問題が取り上げられている。ただ、このテキストを扱うときには、1980年代後半のバブル期の日本という文脈に置いて考えていいのではないか。当時はいかに産むか、という主体（産婦）の側の論理だけであった。当時、原初回帰が流行し、「ステキ」に産むことは、（見せかけの）非管理であった助産施設は「おしゃれ」そのものに演出された。出産育児雑誌も出版が盛んだったが、産褥については語られなかった。バブル期におけるプラスチック文化へのアンチであり、土からの乖離、肉親・地縁からの離脱ともつながる詩集であることを文脈に読み込むと、より面白い論になったのではないか。

第3章「カノコ殺し」の変異／増殖する言葉」は、田中美津のフェミニズムのテキストとの比較がうま

くいったかどうか、評価が査読者によって別れる。しかし、70年代のフェミニズムと80年代のフェミニズムをいかに架橋するかについて、当時の伊藤が論理的な言葉ではなく、もっと身体的で、集合的な感性の言葉で語ったテキストの意図は抽出されていると考える。さらにここにジュディス・バトラーの「アセンブリ」の概念が接続されているが、もう少し説得力ある論述がほしい。

第4章『テリトリー論1』の交差する共同性』は、伊藤、荒木経惟、菊地信義の三者の関係に注目している。80年代の詩と写真と装幀の協働と葛藤のドラマを詩集に見ようとしている。この詩集について「広告のように調和的で整合性の取れた作品ではない」とあるが、「広告」とは別の軸で「調和と整合性」が取れているのではないか。暴力性、嗜虐性、残虐性、不快等々はあるものの、写真と詩とは共鳴している。三者の間に葛藤と対抗は果たしてあったのか。「共犯」ではないかという問いをつきつけたときにどのように見えるのか。うまくいかなかった協働性として「テリトリー論2」と「1」の差に注目してもよかったのではないか。

『河原荒草』をめぐる第5章は、プレテキストとしての説経節との対比を丁寧に論じ、出色ではあるが、内容的には『切腹考』の「キタ・リテラーリス」との相同性がある。「河原」と「荒地」という二つの空間の往復、移動は「テリトリー論」とも関連がある。こうしたテキスト相互の連関性への指摘がほしい。

第6章『切腹考』論は、鷗外を論じた伊藤のテキストをこういう論じ方があるかと思うくらいに、縦横に扱っている。鷗外のテキストに注目しながら、その鷗外のテキストそのものがそれまでのさまざまなテキストの結晶体であるかのように捉え、引用の錯綜のもとに捉えている。なかでも「伊藤が目にするのは、翻訳を通して新たな普通口語文を作ろうとしているなかで生み出されている文体」とする指摘は興味深く、刺激的だ。さらに伊藤自身の語りに戻って、「ユウカリの死は、死であり、また生でもある」というくだりは『河原荒草』につながるし、植物や、それが背後に持たされている移動や皮膚への影響など、『切腹考』「キタ・リテラーリス」に描かれたような深部の共鳴を見るべきである。

総じて『テリトリー論2』と『テリトリー論1』を論じた第1章から第4章までと、『河原荒草』と『切腹考』を論じた第5章・第6章で、大きな断層がある。正確にいうと、『テリトリー論2』のポーランド詩から「カノコ殺し」までの構成を論じた第1章、そのなかの1つ「叫苦と魂消る」を細かく分析した第2章、「カノコ殺し」と同時代フェミニズムを結んだ第3章が大きな塊としてあり、これは引用とインターテクスチャリティをめぐる研究の1つの大きな達成として評価できる。第4章は、これに対して『テリトリー論1』という詩集における協働の内実を明らかにしようとし、言葉と言葉の切断、接合をめぐる問題と、写真家、装幀家、詩人という人間の協働性をめぐる問題をつなげようとしている。これに対して扱われた対象のはざまに発表されたテキスト群、たとえば『家族アート』や『ラニーニャ』という小説ジャンルへの言及が欠けている。小説への挑戦が一定の評価を得ながらも、ついに伊藤からかえりみられなくなる経緯をどうとらえるのか。また育児エッセイやその頃から始まる人生相談の意味も意外に重要なのではないか。『河原荒草』以後でも、『とげ抜き 新築鴨地蔵縁起』のような小説と随筆の境界を超えるテキストについても言及がほしい。

このようにさまざまな要望や宿題が提示されたが、総体として現代作家のテキストを取り上げ、多くの知的刺戟をもたらし、さまざまなコメントを引き出した。そうした誘発力があつたことは認めるべきだろう。とりわけ古典から現代にいたるさまざまな言葉、テキストの集合体として捉える視角はきわめて新鮮であり、個々のテキストの分析としても高い評価を与えうる。少なくとも現代詩における引用とインターテクチュアリティをめぐる研究として、新たな橋頭堡を築いたものと評価できる。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和3年12月10日